

京都の医学の源流

山田 重正

われわれ日本の医史学に興味をよせている京都在住の医師十一名が協力して共同執筆した『京都の医学史』（第三十四回 毎日出版文化賞特別賞）が出版された。演者もそのメンバーの一人として研究中に気のついたことがいくつもあった。その一つのテーマに、平安時代に端を発して千余年をへて、日本の医学がさまざまの変遷をへて明治に至るまでの間の日本の医学の主流は京都の医学の足跡であったということであった。このことは、ここに喋々と述べる必要もないくらい周知のことからであったと申せる。

そしてさらに京都の医学の流れの中心は、京都のみに存在した宮廷の典藥寮の医官たち集団の活動であったし、またそれがその推進力であったのではなからうかと確信をもつに至ったのである。

宮廷およびその周辺の貴紳頭官たちは申すまでもなく最高の権力者たちであったから、彼等は当時の最高かつ最良の医療設備と医師たちとをその周辺にかかえる必要と力があった。

それは宮廷内の内裏と称するエリアの中で典藥寮という建物をつくり、医師たちを管理し運営したのである。当時権威ある政治家たちは技術官としての医師団より優位にたち、その上医官たちをそのままで採用したのではなく、彼等をいつしか世襲職にもちこみ、さらに、医師たちを壮嚴するために位階勲等を与えた。典藥寮の医官たちはのちになって典藥寮

の長官即ち頭にも任命されるようになったが、医学の研鑽を怠らず理論や技術をみがいていった。

もともと奈良時代に創立された官營の典藥寮を含む医療形態は平安時代に至ってさらに整備され、内容も充実されてきたのである。かく優秀な専門家医師団が集められて定着する。後世貴族独占の医学の時代と呼称されるようになった。多くの医家のうち和氣、丹波兩家の医家系統がながく中心的存在となった。

丹波康頼はかの『医心方』という名著を撰述した。平安時代の後期になって律令制国家は終末をつけ、中世に入り封建制の時代に変換しはじめると国民の医療の不毛をもたらすことになった。典藥寮の医師たちは多く鎌倉に下向したが、多数の医家は京洛に残り衰えた京都の医学を守った。

室町時代には京都の医療は歴史的背景の大変動から大きく揺ぎ消えんとして消えず、空虚に近い典藥寮の医官たちは生活苦にあえぎつつ京都の医療のともしびを防衛した。

その頃の仏教の動きは当然大きな影響をうけている。鎌倉末から室町末に至る間、もっとも激しい沈滞を示した仏教のうちで禅宗である臨濟宗のみは活気を示していた。いろいろ変ったが、京都、鎌倉には五山という制度があったのち第一天龍寺・建長寺、第二相国寺・円覚寺、第三建仁寺・寿福寺、第四東福寺・淨智寺、第五万寿寺・淨明寺となって、今日に至っている。

その間に碩学僧が多く輩出した。虎関師鍊、雪村友梅、中巖円月、義堂周信、絶海中津、岐陽方秀、一休宗純らである。これらの活躍したのは文学活動であり後世五山文学として盛名を馳せている。当然坐禅修業は宗乗であり、詩業など余乗に逃避したに過ぎないと批判された。しかしこれらの碩学僧の行動は禅の伝統を辛うじて護った壮挙であったと考えられる。その時の医学を守った典藥寮の医官たちと比較するのは無理かも知れないが、仏教界の情況にも似て、だれが医学の伝統を守ったかという点、それは典藥寮の医師たちであった。

こうした時代を経て近世に入るのであるが、再び医学の興隆を迎える。徳川時代に入ると、宮廷の衰微もさることなが

ら典藥寮の組織と内容は案外充実して、もはや貴族独占の姿はすでに消えさり、医療の大衆化の時代になってきた。更に旧態依然たる和・丹両系の医師たちは旧家と呼ばれ、民間の医療普及から輩出した名医、大医らが続々典藥寮に招かれて医官となった。これらの人々を新家と呼ばれた。

かくの如く京都の医学は衰えたときは地下水の如く流れ、時至れば地表に現れ大河となってほとぼしかったものこそ典藥寮の医官たちであった。

かがやかしい栄光をもった時代もあった宮廷の典藥寮も明治維新の改革によって明治二年（一八六九）九月をもって終止符がうたれ、その歴史は永久に京都から消え去ったのである。

平安時代以来明治に至るまで、長い年月間断もなくつづいたのは京都においても典藥寮という組織だけであったと考える。この組織とそれを構成した医師団の歴史は、ながい首都であった京都ならではの存在しなかつたものであった。その消滅は亡びゆく秋草の如く美しくやさしい姿でもあった。それをなつかしんでその歴史を挽歌をつくるように『典医の歴史』として、演者は粗雑かつ不充分ながら書き綴って世にとりた次第であった。その後、典藥寮の存在と功用を考察するうち書きのこした重要な事項をいくつか思いいたった。それは京都の医学の形成と発展の歩みの原点であり源流であったのではなからうかということである。つとにその世界に興味を持ちつづけてきたもの我田引水的な推論とも考えられる恐れはあると思うし、拙著にそう結論的に記述をしていないのだが、今日、結論的に日本の医学の源流は「京都の医学の歴史」であり、しかも「京都の医学」の源流は派手ではなく、つましやかに沈潜した姿で終始した「典藥寮の歴史」にあるのではあるまいかと考えているのである。

以上は綜説であり、かつ試論である。